
カービィストーリー

Cocoa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カービィストーリー

【NZコード】

NZ893N

【作者名】

coco a

【あらすじ】

争いも滅多になく……それどころか宇宙規模の侵略すら起つたことのないとんでもなく平和な国、プープランド！主人公・カービィが住民達とワイワイガヤガヤやっていく話！

小説初の投稿です

作者からの注意事項

Coco「」の小説を見た方ははじめまして。Cocoと申します！」

ゼロ「……自己紹介はいからさつと本編に入れ」

Coco「ちょっと待つて。これから読者の皆に説明したいことがあります！」

カービイ「説明したいことって？」

Coco「話がだいたいわかつても何でこんな奴がいる…とかだったら困るでしょう」

カービイ「あー、そつか」

Coco「見事にちゅうじこ例がここだ」

ゼロ「明らかに…な」

Coco「では以下のことをあらかじめ」と承くだせー。」

注意点その1『ダクマ族は味方キャラ』

カービイ「珍しいよねこうこうのつて」

Coco「何故か？理由はただ一つ、ダークマター族が悪役のはワンパターンすぎてクソつまんないから」

ゼロ「そりやお前だけだろ」

ゼロツー「そうでもないかもしないけど……（多分）」

ゼロ「肝心のダクマ族は侵略する気はないっていう設定で」

ゼロツー「それと基本的にダクマ族に似たキャラも同族とさせていただきますのでよろしくー」

注意点その2『作者が出てくる理由』

○○○○a 「出るナビツツリヒツテモビでもない」

ゼロ「しつじいだらーが。普通小説に出てへるか？出ないだら？」

○○○○a 「だから今回は説明だから……」

ゼロ「かと言つてどもへてに紛れて出るんぢやないのか？その後の

話（本編）にも」

○○○○a 「出ませんーそれにウチ（作者）が出てへるヒトとは重大発表があるってことだからそれだけは理解してへだせ（ただし後書きは別とします）」

注意点その3『ギャグ（グロ×下ネタ）多め』

カービィ「下ネタの割合高いって」

ゼロ「要するに作者は変人つて」「アト」

○○○○a 「アンタに言われたくないし……」

カービィ（星キモツ）

○○○○a 「とりあえずはですね『よい子の皆さん』は真似しない（言わない）でください』対象のものが多いので……」

ゼロツー「特にこれに関しては』注意ください……」

注意点その4『いろいろと暴走（by ○○○○a）』

ゼロツー「……それ言つたらおしまいだつて」

○○○○a 「頭の回転がフルなんだよー。よくメチャメチャになるけど！」（きつぱつ）

ゼロツー（ハツキリ言つちやつたよこの人……）

○○○○a 「キャラも暴走し……」

カービィ「たまに乱心もある……」

ゼロ「かと言つて作者も「乱心になる」といふことがある」

注意点その5『ストーリー構成について』

カービィ「お話どうすんの?」

○○○○○「ネタバレになるから言わない」

カービィ「作者ヒドーイ! 傷つくな!」

○○○○○「ウソだつてウソ! 謝るからビビンガのギャル系女子の口

調ヤメテ!」

ゼロツー「(ギャル系女子……)で、話は?」

○○○○○「自分で言つのもなんだけど、最初はクッソつまんねえ一話完結式の話をさせていただきます」

ゼロツー「○○○○○さん○○○○○セーん。超ヒドイ」と言つちやつたよー」

○○○○○「めんなさい」

ゼロ「もちろんストーリーも考えているよなー?」

○○○○○「Of course!」

カービィ「狂つてきたのかな……(ぼやつ)」

○○○○○「ただネタバレになるので」これは言こません!」

カービィ(ケチだ……)

○○○○○「あと、場合によつて文章の書き方も変わることもあります。作者の気分ではないので」注意を「

注意点その6『Nero World』

カービィ「何コレ? ゲームでプレイしても出ない単語だけど……」

○○○○○「多分、ダクマ族をこのよつた設定にする人は少ないのでしうね……別名『ダクマ族家族設定』! ! !」

ゼロツー「家族設定！？」

○○○○○「ネタバレになるんでこれも書こません…」

ゼロ「お父さんキャラかな……」

○○○○○「ピンポーン」

ゼロツー「今ので充分ネタバレだよ？」

○○○○○「あ……」

カービィ「そうなるとゼロツーは……」

○○○○○「だいたい想像はつきますよね？答へはわやんと書いておくので気になる人は見てくださいね…」

注意点その7『舞台は……』

カービィ「当然……」

全員「普普フランド……」

○○○○○「……そうとは限らないけど」

カービィ「え？」

○○○○○「とりあえず普普フランドにも設定があつて……」

ゼロ「もう読者は知つてるけどな」

○○○○○「……です」

ゼロ「……んでも終わりか？」

○○○○○「終わりー臨さんどうですか？おわかりいただけました
でしょうか？」

ゼロツー「わかつた！つていう人は次からお話に入りますので……
続き行つちゃつてください！」

○○○○○「最初は一話完結式の話になるけどストーリー制の話が
出来たら発表します！」

アラカルトはいつも……

ゼロ「ではでは『○○○○aの7ヶ条』を見ててくれた読者の皆さん
大変お待たせしました！」

カービィ「何、○○○○aの7ヶ条つて……」

ゼロ「要するに○○○○aによる教え全7ヶ条だ」

ゼロツー「教えじゃなくて注意事項なんだけど……」

ゼロ「いい。それでいい。少なくとも私はそうとしか認識してない」

カービィ・ゼロツー（トイシひでえ……）

ダークゼロ「初っぱなからきたよ、毒舌みたいなものが」

カービィ「堂々と言えるなあ……」

ダークゼロ「そんなことより作者から伝言つス！」

カービィ「あれ、そんなキャラだっけ？」

ダークゼロ「作者の設定上そんなんだから仕方ないつスよ……」

ゼロツー「（読者の人達を混乱させるつもりかな……）で？伝言つ
て……？」

ダークゼロ「『最初は滅茶苦茶です。ストーリー編出来るまではば
らく温かい目でご覧ください』だつて」

カービィ「お話あるのー？」

ダークゼロ「作者曰く『話がないと小説ではないような気がある』
らしじつスよ」

カービィ「そりゃそうだよねえ……」

ゼロツー「要するにまだ出来てないってことじょ。そのストーリー

一編とやらが

ダークゼロ「ピンローン」

ゼロ「ピンローンじゃねえええええええええええええ！」

ダークゼロ「（ウザ……）えー、これは作者が意図的いやつてるん
スよ」

ゼロ「意図的に……？」

ダークゼロ「」の作品ではダクマ族が『メインキャラ』として出てくることスヨ」

ゼロジー「トヨーイ　」

ダークゼロ「（悪役扱こられたから嬉しこんだ……）で、ダクマ族も出てきてよけこじけなになると思つかひ……」

ゼロ「作者が一番じかけにやかけにやだつ…あにつの脳内思考意味不明！」

！」

ダークゼロ「（文句書こうつたー…）とつあえず田舎編から始まるつス！」

カービィ「なんで？」

ダークゼロ「ああもうついで読者を混乱させるつもりがアンタ！？」「じつけにやかけにやかけにやになつたじやん…」

ゼロジー「『メン、君の言ひ』ともさういふこと」

ダークゼロ「と、とつあえず……日常編は主にカービィとダクマ族がどんだけ仲がいいのか、つていう感じで」

ゼロ「説明が適当だなお前」

ダークゼロ「…………」

ゼロジー「内容はほほ思に付きて超いいかげん……じゅうぶんヤバいつてそれ」

カービィ「仕方ないよ、小説書くのが」の作品で初めてだもん」

ゼロジー「F・i・g・u・t・e…だね」

ゼロ「マジでクソつまんなかったらボヘイツしてこいつから」

カービィ「ボーアつて……」

ダークゼロ「とつあえず前置きが長すぎなので始めるつス…」

フフフランド

そこは事件など滅多に起きない場所……
なのでこの国の国民達は、

「あ～……暇……」

大抵はこんな状態である
ただし……こんな人もいる

「うおつやあーーー！」

バリン！

「……………テレビ壊してビリやんの」

「あ」

平凡な日常にあまりふさわしくないこと　テレビを壊すとこう破壊魔のような行動しているピング王……もといカービィ

「これ使いたいものにならないよ…………」
「ゼロジー…………ものはござれ壊れるものだよ」
「…………名言みたいなこと言つてるけど普通ゲーム中に液晶画面ぶち壊す人相当いないよ？」

多分こんな人（ ）はいませんね
もつともなことを言つて白い物体……ゼロジー

さつきまでになかつた悲惨な光景をただ見つめるカービィとゼロジー

「ゲームできなくなつたね…………」

「ま、 しゃうがないよ」

ため息をつくカービィだが突然「こんなことをいい始めた

「今日もプロプランドは……平和だよね」

「……だね。なんでいきなり?」

「……なんとなくそう思つただけ」

プロプランドは……ずっと平和……

誰もがそう感じている

ハハハランジほじつむ……（後書き）

終わったなこれ……

ゼロ「当たり前だ。話にすらなってないし途中から壊れただの」

脳内が暴走しました、ハイ

まあ、日常編は基本的こんな感じでこまめにサビをつけておける自信がない……

ゼロ「やつねとストーリー編出せよ」

ハイ……

期待してた皆さんマジで『あんなこと…』

新「ヒー能力発案大会！？」

ゼロ「ひさびや……のよつな氣がする」
ダークゼロ「2週間ぐらい（正確には1~2日）だからそつでもない
つスよ。まずこの時点で読んでる人少ないから……」
ゼロ「あーもー、うるさい。お前はアレですか、A型人間ですか？」
カービィ「いや、人間じゃないからね？」
ゼロ「擬人化すれば、の話だ」
ゼロジー「……話の論点ズレてるよ」
カービィ「んで……今回の話は？」
ゼロ「作者のことだから適当にやつてるだろ？」
ゼロジー「ヒドッ」

ダークゼロ「まあそれは『日常編において』の話。ストーリー編入
つたらちゃんとやつてくれるよ」
ゼロ「……で、どこまでいつたんだ？」
ダークゼロ「半分ぐらいいつス」
ゼロ「んなペースでちんたらやつてるから……」
カービィ「文句言わない。これでもストーリー編は進行してるから」
ゼロジー「どんな話になるんだろうね？」
カービィ「んなもん知らないよ！それより今回の話は……」
ゼロ「完全に作者の思いつきだ」
カービィ「そりゃそうなんだけど……はあ（相手にするのを疲れ
た様子）」

それでは今回からまともに日常編を開始！

舞台はむちるん プププランド！

「…………」

「何アニカビ見てんだよ、ミラクルマタ
別ニイイジヤナイデスカ……」

ミラクルマター、略してミラマタはボソッと言ひ

「最近『カービィ Wi-Fi』発売……」

「もしもし？『64』以来登場していないからつて……おかしくなりました？？」

といふか『カービィ Wi-Fi』が発売したのは少し前ですが

「……カービィノコピー能力ハ増工テルミタイデスネ
「普通に増えてるよ」
「私ニモコピー能力増工ナイデスカネ」
「悪役が考えた人にそんなサービスするわけないでしょ」
「最弱ノラスボスガ言エル立場ジヤナイデスヨネ」
「『最弱』の単語出たよ（結局）」

若干ため息をつくダーグゼロ（『ドロツチエ団』をプレイしている
〇〇していた方は彼の弱さがわかります）

「アツ、チョツ……アイススパークガ……」
「64のコピー能力！？つかアニメにそんなもん出ないから……」「
「コピー能力ハコピー能力デモ『ミックス』トイウ名ノコピー能力
デス！」
「どにツツコミしたらいいのかわかんない……それでさつきか
ら何が言いたいワケ？」

「新コピー能力デモ考エテルンデスケド」

「……あんたのコピー能力?」

ポカンとした声を出すダークゼロ

「普通にフ属性でいいんじゃないや……」

「ダメデスヨ。小説上『オリジナリティ』トイウモノヲ引キ出シ

……」

「いらないから。そんなもんいらないから

即座に否定するダークゼロですが……
今回の話はここから始まります

「とりあえず日常編初の（まとも?な）話でカービイ出て来なくていいのかな……」

「インジャナイデスカ?」

「いや、主人公が出てこないと大問題じゃない?」

……じゃあ強制的に出す?

「「」遠慮しとく」

「なんで!?」

見事なタイミングでハモつたダークゼロとリラクルマターにカービイのツツ「ミ」が飛んでくる

そもそもカービイさん……今までどこに?

「近くの場所でゼロツーにほつペ引つ張られた」

「遊んでるんだけどね」

「要スル」……ロリーータコンプレックス、デスネ」

「普通にロリコンって言おうよ。使い方間違ってるし」

「ロリコンでもないしね」

当然、カービィは女ではありません

「エ！？見タ目的一女ダト思ツテマシタ」

「見た目で！？」

「それより本題に入らないの？」

「あ、そうだった」

それでは本題に……

「……で、なんの話してたつけ？」

「コピー能力デスヨ！コピー能力！！！」

「あー！」

ダークゼロは思い出した様子

「ボクの？」

「ミラマタの方だよ」

「最近、ゲームで出番ないから小説でオリジナルコピーカード^{リコ}能力を出す
つて魂胆でしょ」

「全然違イマス」

「んじや、なんで……？？」

ミラクルマター曰く、以下の通りになつたらしい

アニメにハマった アニメオリジナル「コピー」能力を見た シュポー！－！で、こうなった

「説明が意味不明なんだけど。しかも『シュポー！－』って何？マイチ感覚的すぎてわかんないんスけど」

「一応興奮シテルン『デスケド』……」

「わかるか！－」

「オリジナル出るのだいぶ後半の方だし……」

とつあえず見た方はわかります

「感情表現わからないのかな、ミラクルマターって」

「そうみたいだよ。基本的に無表情だし考えも全くと言つていいほど全然読めないし……」

ミラクルマターに対するシシ「ミラクル」が満載のようだ

「つまりミラクルマターの新コピー能力を考えてほしこうことで
しょ？」

「ママ、ソウ『デスネ』」

「んな」と言われたつて……そりやあ

「……難しいんじゃない？？？」

「……『デスコネ』」

そり、言に出しつづくのくせに認めるんかい

「でも即出るのが水とかそういう系」

「……確かにそれぐらいしか思い浮かばないよね。この案はどう…」

「……ボツ…！」

「なんで…？」

「カービィノ「**ポピー能力**」既「アルカラデスヨ。パクリジャナイデスカ」

「いや……「**ポピー**ってそもそも対象のモノにマネるんじゃ……」

「それちょっと違う……」

「どっちにしろオレは「**ポピー能力**」パクリしか考えられないの…」

（考え方が幼稚園児級…）

ついそう思つてしまふカービイだがそういう風に出来てるので仕方がない

「とりあえずボツ言つたとなると……」

「手におえないっスね。作者に頼むしかないでしょ」

「いつも手におえない状況なので助けて……」

一瞬、「はー?」となるがカービイの言つてことどがわかつた
ゼロジーの手によつて遊ばれていたからである

「あんた何してんのぉおおおおー?」

「遊び」

ゼロジー本人はそう言つてはいるが、周りから見ればオシオキ（○
「イタズラ」にしか見えない）

それでも数秒の間でこうこう行動するのか……早いな

「新種のイタズラー?」

「オシオキ……テスヨネ？？」

「のんきに会話しないでこの状況どうにかして……」

……その後ようやくカービィを救出。かかつた時間は30分弱といつ長時間のバトルを繰り広げていたということを追記する

ちなみにゼロツーがカービィをいじりまくる理由……

「（カービィ自身が）もちもちしてるとから」

……だそうです

「ロランだロラン!!」

「女扱いしないでよおおおーー！」

新「コピー」能力発案大会！？（後書き）

今回はまともに書いてみました、いかがでしょうか？

ゼロ「今日はまだマシな方なんじやないか？」

ゼロジー「何その上から目線」

……それよりダークゼロ、ミラマタのオコロペを考へると……？

ダークゼロ「……スンマセソ」

まあ、出たら出たで。ハイ

ダークゼロ「いいのかよ！」

ちなみに作者がミラマタの「コピー」能力を見た時の第1印象

- ・バーニング形態 ファイア……？
- ・アイス形態 アイスですよねー
- ・ニードル形態 見た目まんまやん
- ・ストーン形態 カチコチ
- ・ボム形態 毒！！絶対毒！！
- ・スパーク形態 最初はレーザーでしょ「レー…
- ・カッター形態 新種の毛虫…（断言）

ゼロ「お前の反応面白いな」

ミラクルマター「カチコチ……」

ゼロジー「ボム形態が毒つて……」

ダークゼロ「一番ひどい扱いがカッターだしね。といふがどうなつ

たらそう見えるわけ?」

パツと見そんな感じ……

ダークゼロ「カービイがそんなもん認識できたら即吐くよ」

……それもそうだね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2893z/>

カービィストーリー

2011年12月28日22時52分発行